

1 背景・目的

今回田口、玉井の2名は「フィリピンにおける貧困現象のフィールドスタディー」をテーマとしてフィールド調査を行った。本フィールドスタディーは、大学院GRプロジェクトのサブ・プロジェクトである、市民社会勉強会において行なわれる研究の一環として行われたものである。勉強会においては、貧困問題、格差問題等を扱った基本文献の参照、さらに各自の専門分野における視点・視座を他の参加者へ提供・共有し各々の研究を深めていくことを目的としている。

上記の研究における実践の場として、フィリピン・マニラ首都圏ケソン市を事例としたフィールドスタディーを行なった。ケソン市は200万人を超える人口を抱える首都圏最大の都市であり、都市貧困問題が多く起こっている。本調査は都市貧困層の複数の組織、個人を実際に訪れ、都市貧困という多様で複雑な現象や、市民社会のあり方を調査すると共に、参加者各々の対象・関心領域からの複合的視点によりそれらを考察することを目的としている。

2 フィールドスタディー日程

- ・11月30日 フィリピンへ渡航 ケソン市散策
- ・12月1日 NPO「国境なき子どもたち」のスタッフと共にケソン市パヤタス地区、カロオカン市（北部）バゴンシーラン地区訪問
- ・12月2日 現地NGO「Nene-Green and Purple Sanctuary, Inc. (GPS)」とのセッション、マニラ首都圏ケソン市タラヤン地区におけるスラム調査
- ・12月3日 午前、マニラ散策 午後、帰国

3 フィールドスタディー成果

3.1 「国境なき子どもたち」によるスタディーツアー

3.1.1 「国境なき子どもたち」

「国境なき子どもたち」（以下 KnK）は、「開発途上にある国々のストリートチルドレンなど路上生活を送る青少年や恵まれない子どもたち、孤児、虐待の被害にあっている子どもを支援」し、「諸外国の恵まれない子ども・青少年と日本の子ども・青少年がお互いの理解を深め、友情を育み、共に成長していくことを目的」として、アジアの国々で活動を行なっている NPO 法人である（KnK 公式サイトより引用）。KnK のフィリピン事務所では 2001 年より支援活動を始め、2007 年 12 月現在 11 人（内日本人 1 名）のスタッフにより、パヤタス地区、バゴンシーラン地区、そしてカロオカン市（南）に位置する、サガンダーン地区、モニュメント地区、バリタワック地区においてプロジェクトを実施している。具体的には『ストリートチルドレン』、『法に抵触した青少年』、『通学が困難な子どもたち』を対象に、衣食住の提供をはじめ、非公式教育、学校教育、保健衛生の管理などあらゆる角度からのサポートを行なっている（KnK 発行の資料「共に成長するために」より）。

尚本スタディーツアーはパヤタス地区とバゴンシーラン地区において、12月1日に行なわれた。参加者は KnK フィリピン事務所より 1 名、田口、玉井、その他 3 名の計 6 名であった。

3.1.2 パヤタス地区

フィリピン共和国マニラ首都圏ケソン市に位置し、第 1 から第 4 地区に分かれている。人口は約 8 万人³。巨大な廃棄物投棄場があり、毎日約トラック 400 台分のごみがマニラ首都圏開発局により収集され、運ばれてくる。今回パヤタス地区では KnK の支援を受けている裨益者の子どもたち 3 名の家庭を訪問しインタビューを行った（以上 KnK スタッフより得た情報）。パヤタス地区のコミュニティーでは、KnK の支援を受けている子どもたちの母親が中心となってグループを形成し、通常行っている教育や家庭訪問、イベントなどの際、様々な形で KnK の活動を支えている。パヤタスに暮らす住民の中には、ごみ山でリサイクル品を集めて日銭を稼いでいるスカベンジャーが多く存在する。Payatas Operations Group（ケソン市管轄）の報告によると、3,000 人程が

¹ 慶應義塾大学政策・メディア研究科修士課程 1 年（80724865）

² 慶應義塾大学総合政策学部 2 年（70606057）

³ パヤタス地区、及び後述されているバゴンシーラン地区の人口は、あくまで登録料を払い行政に出生登録されている人数である。実際はもっと多いと考えられる。

スカベンジャーとして登録されており、毎日ごみ山で仕事をしている。皮肉にも、行政が推奨するごみの分別回収により、ごみ山に運ばれるごみの中からリサイクル可能なものが減り、ごみから有価物を探し売ることによって収入を得ている人々の所得が減少していることが述べられた。短期的な食料や住居の支援だけでなく、長期的に考えた場合、こうした人びとへの新たな収入源や仕事の確保が必要であると強く感じられた。

3.1.3 バゴンシーラン地区

フィリピン共和国マニラ首都圏カロオカン市（北部）に位置する。人口は約 57 万人。今回訪れたのは第 1 地区と第 7 地区である。第 1 地区では、「若者の家」と呼ばれる青少年のための更生と自立を目的としたグループホームを訪ねた。KnK は様々な過去を抱える子どもたちを保護し、精神面でのサポートや教育、住居等の支援を行っている。また第 7 地区においては、通常、非公式教育（Alternative Learning System : ALS）⁴を行っている同センター内で、毎週土曜日に行われている課外活動を見学した。通常の課外活動であれば 50 名以上の生徒が参加するが、11 月 29 日に行われた年に一度の大きなイベント（KnK Reunion Party）の直後であったこと、また当日は担当の講師が欠席であったこともあり約 20 名の生徒のみが出席した。この日は訪問者と子どもたちが共に参加して、各々の発想力を活かし楽しみながらグループワークをし、またそれぞれの国における異文化についての質疑応答を行った。因みに、ALS の教育プロジェクトでは毎週平日 3 回の授業を行っている。前期には国語や算数（数学）、英語・社会、そして道徳等を教え、普通の教育機関と同様に指導を行い、後期は予備校のように試験⁵のための勉強を行なうとのことであった。

3.2 Nene-Green and Purple Sanctuary, Inc. (GPS) とのセッション

3.2.1 概要

12 月 2 日には、現地 NGO である「Nene-Green and Purple Sanctuary, Inc. (GPS)」とのセッションを、ケソン市のタタロン地区にある彼女らのシェルターにて行った。参加者は GPS より 4 名、田口、玉井、その他 2 名の計 8 名であった。GPS の活動紹介、メンバー 2 名からパーソナル・ヒストリーについてのプレゼンテーション、及び質疑応答を行い、彼女らの活動について理解を深めた。

3.2.2 GPS の概要

GPS は 1975 年に都市貧困層にて作られた組織である。基本理念としては「個人的なことは、政治的なことである」として、個人の行動がコミュニティーから国家、国際社会へと影響を与えることができるという理念に基づいて活動を行っている。具体的な活動プログラムとして、医療、障害者支援、都市貧困層における住民の組織化、コミュニティー間のネットワーキングなど様々な活動が行われてきた。また 2001 年に NGO として認定された。しかし、2005 年に共同設立者の数名が亡くなるなどを理由に活動内容を方向転換し、現在では、住民のライフ・スタイルに関するサポートなどを行っている。

3.2.3 2人のメンバーによるプレゼンテーション

2 人のメンバーから、それぞれのパーソナル・ヒストリーを聞いた。1 人は、GPS との出会いによる人生の転換に関しての話であった。幼少時代から両親からの虐待を受け、その後結婚、出産後のナイトクラブで働く日々を送っていたが、1997 年に GPS のメンバーと出会い、自分のコミュニティーで活動を行なうようになった。GPS と出会った時に「驚いたのは、私のバックグラウンドなどいちいち問答せずに、無条件に受け入れてくれたこと」とあるように、GPS との出会いが自分の人生の転換期となり、以後様々な活動に取り組むこととなった。2 人目の話では、マルコス独裁政権時代において拘留を経験しながらも、住民組織のリーダーとしてさまざまな活動をしてきたことに関しての話であった。女性を中心として組織された当時の住民組織が、時として政府の強制立ち退きに対してバリケードを作りながら果敢に抵抗したこと、当時の厳しい独裁政治、また人びとの彼女への信頼、彼女自身の強さに関して述べられた。

⁴ 「通学が困難な子どもたちや法に抵触している青少年に教育の機会を提供し、子どもたちが勉強を続けることができるような環境を作ること」である（KnK 発行の資料「共に成長するために」より）。お金が無い、家庭内暴力を受ける、働かなければならない等の理由により学校に行くことができなくなり、学校を途中でドロップアウトしてしまった子どもたちは、もし公立の学校に復学したとしても勉強についていけなく、またお金が無くなる等の理由により学校を辞めてしまうことがある。そこで KnK が独自に教育の機会を提供する。

⁵ ここで述べている試験とは、Accreditation and Equivalence Test（A and E Test）と呼ばれるもので、15 歳以上であれば受験可能であり、この試験に合格すれば高等教育卒業の資格を得る事が出来る。ただし試験は決して簡単なものではなく、1 年で合格する生徒はなかなかいないと言う。そのため教育にも力が入っており、子どもたちと話していた時も、毎週のように小テストがあると述べていた。